

も出て居る、

石川欽一郎氏の作五點皆臺灣での作で例の簡潔な描方で「河岸」の人物等皆一點で描かれてあり乍ら皆活動して居る氏の使用する色は美しくて見あきのせぬ色だ、「葱畑」、「竹藪」共に好きな畫であつたが光線の工合と高くにあつた爲めよく分らなかつた。以上は感じた儘である、盲評多謝

あこがれ記

豊州 片 葉 子

○萬朝報なら文藝消息、讀賣新聞ならよみうり抄。帯封を切る手の動作をもどかしくわが飢ゑた眼はずぐそこに落ちて行くのである。如何にもこの小さい活字の狭い範圍を歸るべき天國の様に思つてゐるのかしら。實に蘆花が歩いて永遠を思ふに足るといつたわが家の富を思はずには居られない。

○ある新聞紙は某氏が渡歐の報を吾に齎した。この報に接した吾は同時にさる美術家通によつて氏の年齒が吾に伯仲であることまでも併せ知り得た。そして一種の恥しき反抗を感得した。噫かくして吾といふ吾は花が咲かないで枯れてしまふのではあるまいかと。

○如何なる天秤を使用したなら自己の天才を量り得るだらうか。學生時代の甲の符號や先生の稱讚といふ様なものが果して信賴すべきものだらうか。ナショナルのウエストの記事とわが母の肖像の失敗との比較に於て何だかおぼつかない感じがする

ではないか。

○山に趣味を持つてゐるのやれ人體が面白いのとよく口にひたがる。心にもいくらか思つてゐるらしい。然し繪が出来て見るとそれはいつも海も海の繪ばかりではないか。やはり吾は海の人だつた。人や山といつたのはあれは他人の聲だつた。さまよへる趣味といふ鏡に反映した影はあまり面白くもないではないかと思つて見た。

○定見なき趣味は畫面に自我の光をきらめかすことは出来まい。人が紫といへば紫。外光といへば何も彼も外光。かかる不定見が常に眞を偽るのではあるまいか。偽の中に何が美である。吾にはだれがどういつても畫布の上の眞はすぐに美であるとかう思ふ。

○美の影を捕へようとするとするものはあながちに美術家のみでもあるまい。美を愛するといふ所謂審美的情操は人間の本能的一徴證ではあるまいか。

○吾はその美をあらゆる所に發見し得る人を美術家とするのである。美は人間到所にこれあるのである。わが眞即ち美の見解からして眞なる所にはいつも美の影を潜めてゐるべきである。その影を捕へなければ藝術は遂にその意味を有しないのである。

○虚飾は美の反對で醜である。うまさうな言いふて尻の皮のはげるのと天真爛漫にしていつわらぬのと何れをとるか。虚飾にだまされて醜と感じない底の人とはとても美術家たり得るの要素

を具備しないのである。

○日本畫のすべつこいのばかり見なれた人にわが繪を見せるとわけもなく批難する。すべつこい線てなけりやはり承知が出来ないと見える。遠近の苦心や光線の經營には一寸も心は留めないで影のマッスの美を勿體ない兒戯だなんてひやかしていつた。

○その人が去つてやつと胸をなで下して、あの人は可愛相だなと思つた。するとどこかの角の方で勝利の鬨聲が淡い調子に振亂した。

○人は平凡だと氣にも留めないで而も我には大なる意味を有してゐる場合が嘗て幾度も有り得た。吾は常に平凡をあさつて平凡の中に平凡を求めてゐるのである。そして求め得たる平凡をわが趣味と思つてゐる。

○一日に二度づつ歩む往還の左右の風物は皆是平凡である。朝日を受ける平凡、夕日を浴びる平凡、さては雨の日風の日の平凡。かかる平凡の變化は常にわが視覺を通じてわが腦裡に一の波紋を生ぜしめずには置かない。か様な波紋を受取り得た度毎に人知らぬこの幸福を雀躍せずには居られない。

審査員に望む

大阪 大隅 月 峰

十一月五日當地お伽俱樂部主催にかゝる子供寫生會が京坂電軌沿線に開かれ越えて十四日よりその展覽會が香里園で開催された。作品は總て七百餘點にて殆んど水彩畫が全部を占めて居

た。元より小さき子供(當市全小學校の尋常五年より高等二年迄の撰拔生)の作であるからには駄作許りの陳列と云つてと餘り差聞えないであらう。然し僕は斯る會の物質的の大阪に開かれたのは洋畫普及上に非常に利益があると思つて心より嬉しかつた。場中で佳と思ひしは

八幡社前の女、平野の下瞰、八幡神社、淀川沿ひ、寺門、水邊の林、神の森、伏見の家、其他二三

それについて僕はその審査に少し公平を欠きはしなかつたかと思はれるのである。僕は等級の如何なる順序かは知らないけれども假に特等を首席とするならば僕は八幡神社の畫に特等の賞を附したる理由を解するに苦しむのである。彼の燈籠の輪廓、石崖に寫る影の色。ア、何處に特等の資格があらう。僕はむしろ優秀の級の八幡社前の女の畫を特等にしたかつた彼の簡單にして要を得たる一寸得難たいスケッチ(子供として)にてよくその感興を捕へたるは感ずる次第である。僕はかゝる會に於ては充分眞面目に審査せられたきを願ふものである。少年は僅かの事に慢し易き者である然して最も誘惑され易き者である。審査員諸氏宜敷に留意せられん事を望む

終りに此會の永續を希ふて止まず (十一月廿三日)

素人の繪畫鑑賞と云ふ事

大阪 歳 湯 木

私の友人には『氣分』と云ふ事を非常に大切がる人があり、普